

1 情勢報告

○津野山のユズ出荷が11月4日から始まる。

JA 津野山ユズ部会



目慣らし会



出荷風景

津野山農協ユズ部会は、出荷目慣らし会を10月28日、3ヶ所で開催しました。JAと振興センターから収穫・出荷についての説明を行い、参加者47名にJA馬路村の出荷規格に沿った出荷の意識の統一が図られました。

本年の出荷は11月4日から始まり、11月16日現在までの出荷量は、約14tとなりました。本年は裏年で、出荷量が確保できるか心配されましたが、まずまずの出荷量となっています。

今後、振興センターでは、JA等と連携しながら、栽培技術の講習会や巡回を行い、JA馬路村への原料供給地としての産地確立に向けた取り組みを支援していきます。

○須崎地区農村女性リーダー交流会（11月11日）開催。

須崎地区農村女性リーダー「かつお・かわうそ・あゆの会」



天ぷらづくりの体験

農村女性リーダー9名が参加して、交流会が開催されました。

交流会は、須崎地区4市町の農村女性リーダー32名の連携活動を強化し、相互交流、親睦を深め、日頃の問題解決に役立てるよう、毎年1回開催しています。今年は、須崎市の農村女性リーダーが計画し、（株）けんかまを会場に、天ぷらづくりの体験、環境浄化微生物資材「よろずai」の情報交換等を行いました。

参加者からは、個別経営や地域での活動に忙しく、農村女性リーダーで集まっての活動を新たに始めることは難しいが、須崎地区の活動やネットワークの活動等、出られる活動には参加したいとの意見が出ました。今後も、振興センターでは、農村女性リーダーの活動を支援します。

1 情勢報告

○米ナス品目別研究会（11月2日）で生産者同士が検討、交流。

J A津野山ナス部会



高温耐性をもった新品種の試食をする生産者

山間試験場に高知県下の米ナス生産者38名が集まり、品目別研究会が開催されました。場内のハウスで、試験栽培中の高温耐性のあるナス品種の栽培状況や灌水・施肥試験の様子を見学しました。その後各地からの現状報告、簡易雨よけ施設の提案、そして露地栽培で販売事故を回避するためのJ A受け入れ後の予冷の実施などの報告がありました。

本振興センターからは、春先～梅雨明けまでの天候不順による生育不良、梅雨明け後の低日照高夜温による着果不良などの調査結果を報告しました。

振興センターは、米ナスは出荷量が減少してきているので、高齢者でもできるIPM技術などを駆使して収量・秀品率を上げていくよう、生産者を支援していきます。

○「にこまる」の食味会（11月19日）を行いました。



こうち型集落営農に取り組んでいる津野町の芳生野百石営農組合水稻部会は水田約16haを活動対象としています。

その水稻品種は殆ど「ヒノヒカリ」で、1品種だけでは収穫作業が集中するために作業分散が必要となってきます。

そこで、振興センターは「ヒノヒカリ」よりも収穫が10日ほど遅い「にこまる」の導入を計画しています。

まずは、地区の方々が総出で行う諏訪神社大祭で試食してもらいました。食味の結果、老若男女の全員から「外觀・香り・ねばり・硬さ・味」で高評価が得られました。

この高評価を水稻部会で説明し、「にこまる」等を取り入れた水稻作付け体系を検討していきます。

○ミョウガの腐敗事故防止対策に取り組みます。

J A土佐くろしおミョウガ部会



総会

11月11日、J A土佐くろしおミョウガ部会の平成22園芸年度決算総会がJ A本所で開催され、事業報告など事務局から提案された議案は全て承認されました。

総会では、22園芸年度に腐敗事故の発生が課題となったことから、23園芸年度には腐敗対策研究費を予算化し関係機関と協力して腐敗事故防止対策を進めることが承認されました。

また、「安全・安心、新鮮を最重点事項とし」「安定供給による信頼される産地・責任産地としての役割を果たす」ことを併せて確認しました。

振興センターは、「まとまりのある園芸産地育成事業」による現地検討会を実施し、総会で呼びかけた各自の目標収量の達成を支援します。また関係機関と連携して花蕾腐敗対策を組み立てます。

1 情勢報告

○ハウスシシトウの I P M 技術の取組が進む。

J A 土佐くろしお ハウスシシトウ部会



J A 土佐くろしおハウスシシトウ部会では、11月5日に、出荷始め総会も開催され、本格的な出荷が始まっています。本園芸年度の促成シシトウ栽培では、昨年度の I P M 技術実証ほでの成績が良かったことから、天敵利用による害虫対策に取り組む農家の方が急増（導入農家率：約76%）しています。

11月9日には、篤農家ほ場および実証ほ場で現地検討会が開催され、収量向上のための栽培管理や I P M 技術（特に、天敵利用技術）について意見交換、検討が行なわれました。参加者からは、農薬散布労力が大きく軽減されていること、I P M 技術に取り組むことによりハウス内環境が変化してきたこと等について活発な意見が出されていました。